充実した時間

田中都慈子

この頃は、毎日が忙しく一年があっという間に過ぎていく。しかしその中で、ふと子どもたちと何かに夢中になって過ごす時がある。

充実して楽しく、後になって思いかえしても「よかった」と思うような時である。

ある日、K子ちゃんがよびにきて「一緒に遊ぼう」というので、山の上（園庭の一部でそうよばれている場所）へ行こうということになり、木々の間の道を登って山の上に出た。

ままごとをしている子どもたち数人と、ジャングルジムにのぼっている子どもたちがいて、静かな雰囲気であった。

K子ちゃんは、クローバーの花をつむといってつみはじめ、おおばこの茎でおすもうをしたりした。「もしかして四つ葉のクローバーが見つかるかもしれないわよ」といったら、探すということになり、あっちこっち移動しながら、なんと四枚も見つけることができた。K子ちゃんは、それをもって大喜び。たまたまその日に幼稚園に観察にみえていた大学の先生とも御一緒に、数人の子どもたちもつられて探しまわり、食事の時間まで粘り強く続いた。後で伺った話では、K子ちゃんも担任の先生に「楽しかった」といっていたそうである。あれから廊下で会うと、「また探しにいこうね」という。大学の先生も「はじめての四つ葉探しでした。楽しい時間でした」といわれた。

また、三歳のMくんとSくんと一緒に虫探しをした時も、虫かごをもち、どこかに虫はいないかなと思いながら園庭を歩き回ったが、なかなか見つからない。ふと見ると、小枝から、くもの糸にぶら下がった枯れ葉を見つけた。何もしないのに枯れ葉が、宙に浮いて風にゆれている。息を吹きかけて風をつくる。三人で吹いたらあまりの大風にはっぱは飛んでいって、枝の中に消えてしまった。

じっと見つめる子どもたちの真剣な目。「不思議だね」「おもしろいね」

口々にいって、また別の不思議なものを探しに出発した。

穴を見つければ、「これは何んだろう」。自然の中に、新しいものを見る。

「くだらない」といってしまえばそれまでだが、その意味のないようなことの中に大事なことが含まれているように思う。

「こんな家がつくりたいな」と子どもたちにいわれ、頭をかかえて、ああでもない、こうでもないと一緒に考えているうちに、形もはっきりしてくると、子どもたちも私も、だんだん夢中になってくる。そういう時間もまた、過ぎた後に充足感をもたらす。

集中して物事にとりくむことが出来るようになる下地は、小さい頃からの生活の中にあると思う。それを助けることのできる大人でありたい。そして一緒に熱中し、そこに幸せを感じる心を持ち続けたいと願う。そして、そのような時間が持てた時、本当にうれしく思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）